

「対」が織りなす世界

日本病院薬剤師会監事
イムス三芳総合病院薬剤部
佐藤 秀昭 Hideaki SATO



自然の草木の風合を保ちつつ、染め糸で織り上げられた「紬」は、素朴で優しく心を豊かにしてくれる。現代はIT時代、人の心を癒し豊かにしてくれる商品やサービスは、何か…。

超高齢社会を迎え、患者の気持ちを癒し豊かにする医療サービスを模索している。患者はどんなサービスを求めているのか…常識にとらわれない豊かな発想で考えてみる必要がある。それには医療従事者の一人ひとりが「ゆとり」ある働き方をすることが必須と考える。しかし、現実には長時間労働が当たり前となっている。これから、医療サービスの質を下げないで安心できる医療の提供、すなわち、国民の支持が得られるような「働き方改革」が薬剤師に求められる。

この改革の一步として、薬剤師一人ひとりの知識、能力の向上が必須である。このことにより、薬剤師は情報による処方変更提案および患者への服薬指導にかかる時間が短縮され、充実した時間を過ごし、さらに余裕ある働き方が可能になる。今、医療が急速に多様化する時代、チーム医療の推進を図り薬学的観点から薬物療法の安全性確保や薬物療法の個別化、最適化を推進するための処方変更提案は、薬剤師に課せられた重要な職責となる。これから、pharmacokinetics/pharmacodynamics (PK/PD) 理論、遺伝子変異・遺伝子多型情報などに基づくテイラーメイド医療の導入など薬物治療のさらなる高度化に伴い、医療チームの一員として医師、看護師やほかの医療スタッフとの協働を図り、処方変更提案を積極的に実施し「質の高い安心・安全な医療」の確保が求められる。

この確保には、職種間を越えた情報共有による業務効率化を図ることが必要と考える。太古の昔から、人間はもちろんのこと動植物も「対」をなし、コミュニケーションを取り各自の役割を果し、この自然界が成り立っている。「対」という絶妙なバランスの基で。医療の世界も多くの職種の異なったスタッフが「対」をなしている。「スタッフと気持ちを合わせ、お互いの得意分野が違うことを認め、信頼し、役割を分担する」チーム医療への取り組みが求められる。薬剤師は、「薬」の専門家としての役割がある。この役割を果すには、人と人とお互いに自分の伝えたいことを「伝えること」「伝わること」による意思疎通を図ることが重要である。しかし、人に気持ちを伝えるのはとても難しい。縦糸と横糸が「対」になり丈夫で美しい紬の布が織られるように、丁寧に「伝えること」「伝わること」を心掛けたいと思う。

談笑から、しばしば仕事に結びつく素晴らしいアイデアが浮ぶことがある。こんな「ゆとり」を通じ、楽しみながら仕事をするのが医療施設での活躍する源になっていると考える。2018年5月18日付け日本経済新聞の「交遊抄」に、働きアリの群れの2割は働かないとの研究から、どんな組織にもサボる人がいるとの通説がある。だが、実は働かないアリは水害などで巣を移す非常時に、引先して群れに貢献するのだという。人生において、ゆとりと仕事の「対」も長い時間軸で見ると重要なかもしれない。